

一般
寄稿



看護学科

実践と教育を看護・医療の研究に 編み込む方略の検討

— Andrea Baumann 先生による特別講演報告 —

林 美奈子

Minako HAYASHI

看護学部看護学科教授

友竹 千恵

Chie TOMOTAKE

看護学部看護学科専任講師

高桑 優子

Yuko TAKAKUWA

看護学部看護学科助教

本島 茉那美

Manami MOTOJIMA

看護学部看護学科助教

石光 芙美子

Fumiko ISHIMITSU

愛知県立大学看護学部准教授

糸井 志津乃

Shizuno ITOI

看護学部看護学科教授

堤 千鶴子

Chizuko TSUTSUMI

看護学部看護学科教授

薦田 烈

Takeshi KOMODA

看護学部看護学科教授



武田 保江

Yasue TAKEDA

看護学部メディカルスタッフ研修センター教授

矢野 秀典

Hidenori YANO

保健医療学部理学療法学科教授

前島 徹

Toru MAESHIMA

保健医療学部作業療法学科教授

高崎 純子

Junko TAKASAKI

保健医療学部言語聴覚学科専任講師

荏原 順子

Junko EBARA

人間学部人間福祉学科教授

1 はじめに

本学の教育向上関連プロジェクト助成を活用し、カナダにてプライマルヘルスケアの実践と看護教育に従事している Andrea Baumann 先生に講演していただき、日本の現状と本学・各個人の今後の活動について、教員・ケア提供者・実践者・大学院生・学部生等が検討する機会を得たので報告する。

日本においても包括医療・ケアが話題となっている。社会の状況を踏まえて、看護学部生、大学院生、認定看護師研修生などを対象に「包括ケアが求められるこれからの医療分野において質の高いケアを提供するために」というテーマで講演を行った。参加者は72人であった。また、看護・保健医療系の大学教員・臨床看護師等を対象に「看護・医療分野の実践と教育を編み込む研究の方略」というテーマで講演を行った。参加者は51人であった。

2 学生たちへの講演「変化しつつある看護職の現状クオリティーケアへの示唆」

学生等を対象に「何が看護を変えているのか？」につ

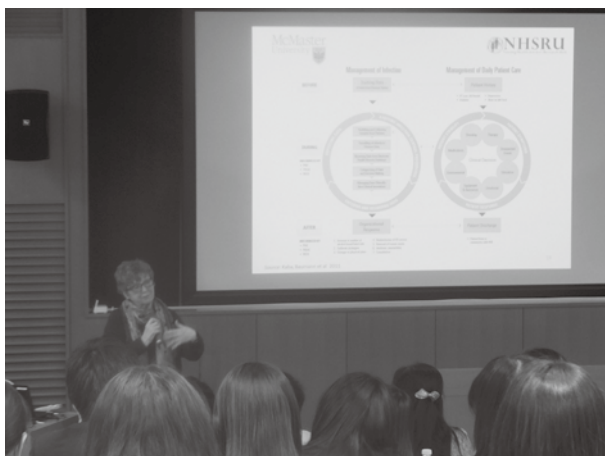
いて、1. 情報の量、2. 情報へのアクセス、3. 迅速性と判断の回数、4. 情報の評価、5. 判断への情報の統合の5つの視点から説明する。

情報は、新聞・学術雑誌記事・本・インターネット・研究報告・事例報告など多種多様な情報源がある。情報は研究にまた自分の判断に影響を与える。ではどのように情報が研究や私たちの仕事に影響を及ぼすのかを、政策の分野の例として情報が判断に影響を及ぼした自身の実施した調査研究について説明する。雇用の動向を明らかにし、新卒看護師常勤者の減少が看護の質の低下を招いていることを明らかにし、看護教育への奨学金制度の充実が必要であるという結論から政策への反映を実現し、常勤の新卒看護師常勤者の増加となった。

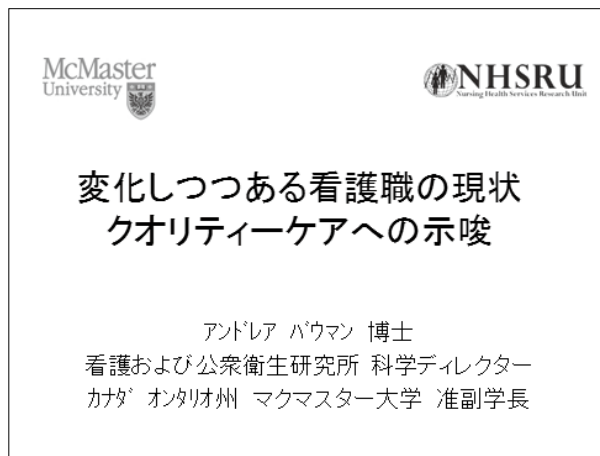
また、オンタリオ州内の病院の院内感染（クロストリジウム・ディフィシル）による死亡者の減少のための感染予防対策の方略を目指した研究事例を話された。感染者の追跡調査を、感染症対策手順の監査・組織の対応・データの報告のステップにて実施し、不足している感染予防行動を明確にし、その結果を基に、行動化できる具体的方略の提示を行った。各病院が具体的方略の実践をした結果、感染症の減少を見ることが出来た。

このように、科学的根拠に基づいたデータが、政策を変えうること、臨床現場を変えうる事が明らかである。

臨床現場における改革は、情報の量、情報へのアクセス、迅速性と判断の回数、情報の評価、判断への情報の



学生等への講演中の A. Baumann 先生



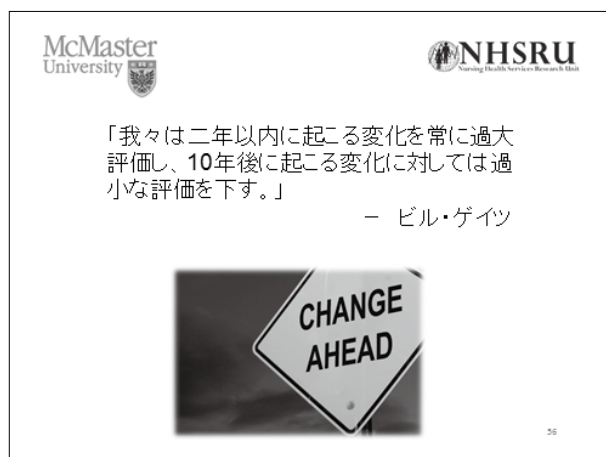
講演用スライド 1 枚目

統合の5つがポイントとなる。複雑性を減らす、問題を打開する、事実と情報の収集、優先順位を変えていくなど膨大な情報の管理をしていく必要がある。

つまり、データは時間の流れとともに看護に変化をもたらし、データの展開—実践における変革は漸次的であり、変革以前に情報の適用が行われるということである。

これからの研究として、包括医療・ケアの効果的実践を目指すためには、クラスター研究が重要になってくるだろう。多様な領域の研究や研究者が同現象の調査をそれぞれの視点から共同して行っていくこと、データの適用範囲の拡大がそこでは行われている。それは、看護の質の向上を目指してのものであり、専門職としての責任を認知した上で実践していく必要がある。

最後に学生たちへのエールとして、以下のスライドで閉める。



学生達へ A. Baumann 先生からのメッセージ

《学生等からの質問と応答》

講演終了後、学生・大学院生よりいくつかの質問があった。質問は、日本の離職理由を挙げながらカナダの看護師の離職の原因について、男性看護師のカナダの人数や役割について、情報入手力の必要性を実感できたが、10年後を見据えた情報の入手を実践者となつてからの先を見る力の得る方法のアドバイスを、研究成果を政策に反映・影響するためには、研究論文の中に政策案までを入れた論文にする必要があるのか、膨大な情報を

実践に活用するための精選する・活用する能力育成のカナダの状況について、提供されている看護の質の地域差の有無について、日本の医療についてのご意見を等であった。

A. Baumann 先生は、一つ一つの質問に対して具体的にわかりやすく説明し、自分の考えを伝えた。そして、卒業したらぜひカナダの大学に来てほしい、学生の皆さんと意見交換をすることができたことに幸せを感じ、会うことができたことをうれしく思う、と締めくくった。



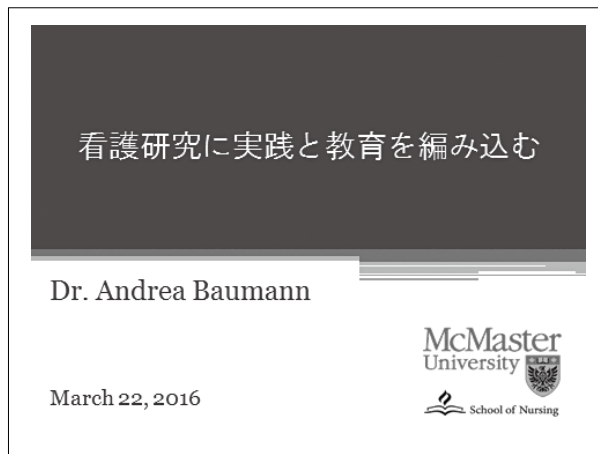
学生からの質問



学生からの質問を受けている A. Baumann 先生



教員等への公演中の A. Baumann 先生



講演用スライド 1 枚目

3 教育・実践者への講演「看護・医療分野の実践と教育を編み込む研究の方略」

教員等を対象に「教育研究に実践を編み込むことと織り込むこと」という視点で、色々な材料と方法を用いて一つのモノを作り上げる、いくつかのものをまとめて編成することについて実際の研究を用いながら説明する。

研究の統合化は、教育理論・基礎科学・医科学・看護科学・革新的教育方法の提供により、臨床実践と教育の質の向上を目指す。看護研究に実践・政策・教育を連携させる方法は、看護研究を中心に実践・政策・臨床・教育を連携させることであり、研究を臨床実践に編み込むということである。典型的な臨床の事例を用いて、研究的なアプローチによる退院に向けての検討・準備実践・環境調整・社会資源の活用などのより、患者の症状・反応・安定を目指し、退院を実現することができることを提示した。

研究を政策に編み込むということについては、学生等を対象にした内容をさらに、エビデンスから制度化へ、制度の立案に関連した研究に焦点化して説明する。

また、研究と教育との編み込みについて、革新的教育法として、問題型（PBL学習法）・探求型（IBL学習法）・事例型（ケース学習法）があり、現在も新たな学習方法

の探究がなされている。革新的教育法の評価とその測定が必要であるが、数学・科学教育の高い位置づけや、日本看護科学ジャーナル概説の定量的測定アプローチの重視からか、教育研究の不足があると考えられる。教授法の革新：学びの促進とリサーチ研究の理解として、世界的な無料の誰にでも解放されている大規模オンライン・コミュニケーションを紹介する。テッドトーク（Ted Talks）・カーンアカデミー（Khan Academy）・MOCC（Massive Online Communication）は、いずれも英語でのものであるが、ぜひ活用してしてほしい。自身の革新的な教育法の情報提供もしていかなれることを期待する。

まとめとして実践と教育に研究を編み込むとは、毛糸を編み込み形を作るイメージであり、膨大な情報量・多様な情報源・意味のある情報の集積が不可欠である。これらを実行するには、研究への資金支援が不可欠である。そのことの社会への働きかけをされることを期待する。と講演を閉めた。

《教員等からの質問と応答》

講演終了後、教員・看護師よりいくつかの質問があった。質問は、看護師・准看護師の制度の一本化を目指した研究成果を政策に反映させたいが医師による研究成果と相反する状況をどのように克服するかについて、政策に反映させるために国民のニーズの反映・協力を得るための方略について、研究者・教員・臨床看護師が協力する



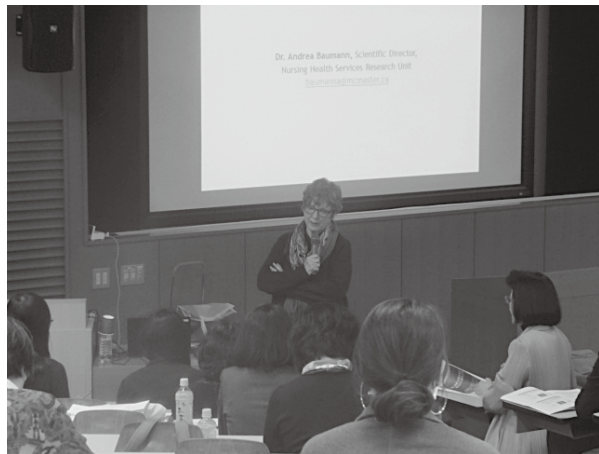
質問する教員

ための密接なコミュニティの作り方について等であった。
Andrea. Baumann先生は、それぞれの質問に対して、今までの研究・教育・政策への関与実践を通しての知見を具体的事例・考えを交えて応えられた。

4 アンケートより

学生等の特別講演に参加しての感想は、満足・概ね満足が67人(90%)であった。学びになったこと(複数回答)は、情報と看護・医療の政策との関連(64人)、看護における情報の意義(42人)、情報が看護実践に及ぼす影響(36人)、今後の看護の可能性・方向性(22人)などであった。

自由意見・感想として、「看護の質を高めるため、声を上げること、それにデータ、資料がおよぼす影響を学ぶことができよかったです。1年ということで、知識の不足している部分を感じましたが、これからの学習につなげていくことで、よりよい学習をしていきたいと思いました。」「海外の包括ケアの現状がわかり大変参考になりました。今後どのように看護師が進まなければならないか考えることができました。」「看護師としての役割は患者さんに良い援助を提供することだと思っていたが、今日の話聞いて、看護師の労働環境改善など政策



質問に答える A. Baumann 先生

までを生み出すような研究を実施することなど大切なことだと感じた。すごく視野が広がって良い学びができました。」等であった。

教員等の特別講演に参加しての感想は、満足・概ね満足が22人(59%)であった。特に自分の役に立つと思った内容は、「看護研究に実践・政策教育を連動させるということ。」「看護における研究の意義が少しわかった。臨床をやりながらも確実なエビデンスが得られるように研究していくことが重要なので、努力していこうと思う。」「教育、研究、臨床は相互作用で進歩するものと思っていたが、「研究」を中心として互いを関連させ、それを政策にまで発展させていくというモデルは大事な視点かなと思った。」等であった。

自由意見・感想として、「質疑応答時間は、時間的にもよく有効だった。」「本学でこのような刺激となる講演が聞けて大変嬉しい。」「各分野の連携がとれた環境作りが大切だと思った。」「研究論文を読み、理解を深めたいと思う。」「他大学や専門学校等の教員にも講演会に来て頂けたらよかったと思う。」等であった。

5 おわりに

学生等に日本以外の看護の状況と日本における看護の

今後について考える機会とすることの出来る場の提供と、教員等に看護の臨床と教育と政策を研究によって改善することが可能であり、プロフェッショナルとしてそれを継続的に遂行してゆく必要があることをあらためて認識する場の提供となったと考える。

このような場の企画・実施の支援をしていただいた本学の特別研究費制度に感謝しつつ、今後もこのような機会を実践できるように検討・努力してゆきたい。なお、本講演のDVD化により、参加できなかった学生・教員等への教材とするとともに、冊子にまとめる予定である。

最後にカナダから来日し、目白大学看護学部にて2つの講演をしていただいた Andrea. Baumann 先生に深く感謝したい。